「ホクホク」も「ねっとり」も美味 サトイモ

【連作を避ける】

サトイモは収穫までの期間が比較的長い作物なので、どこに植えるかをしっかり計画しましょう。連作を嫌うので一度栽培したら3～4年は同じ場所を避けます。

寒さが苦手です。4月上旬～5月に植え付けるとよいでしょう。水持ちのよい土壌を好むので、乾燥防止と保温効果を狙ってマルチを張るのがおすすめです。

図1 サトイモの生長と土寄せ

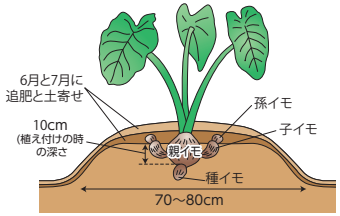


図2 植え付けから1ヵ月ほどの時

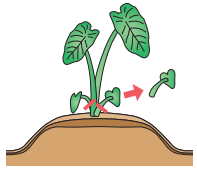
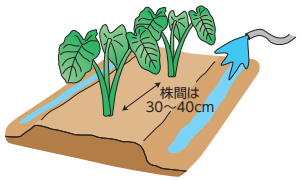


図3 夏場に乾燥が続く時



【畑の準備】

1条植えなら70～80㎝、2条植えなら1ｍほどの畝を作ります。植え付けの2～3週間前までに1㎡当たり苦土石灰100g、堆肥2kgを混ぜ込んでおきます。1週間前には元肥として化成肥料を1㎡当たり100g（NPK各成分10％）を土に混ぜ込みます。

【植え付け】

株間は30～40㎝あけ、深さ10㎝ほどのところに種イモの芽を上に向けて植えつけます。

催芽（芽出し）してから植え付けると、植え付け後に腐るなどのリスクを防げ、イモの太りもよくなります。

方法は、プランターやポットに種イモを仮植えして暖かい場所に置き、乾いたら水やりします。発芽したら、畑に定植します。収穫は通常では10月頃からですが、催芽した場合は8月末からと早く収穫できます。試し掘りしてから収穫します。

【マルチをずらして土寄せを】

発芽から3週間ほどしたら追肥と土寄せをします。子イモが地上に出て緑化し形や品質が悪くなるのを防ぎ、イモの太りをよくします。マルチをしている場合はずらして行います。6月と7月に1カ月おきに1株あたり一握り程度の化成肥料を施し土寄せします。株元に5センチほどの厚みに土がかぶるように盛り上げます（図1）。

【株を充実させるこんな方法も】

植え付けから1カ月ほど経って2本以上の芽が出てきたら、勢いのある芽を1本残して他の新芽はすべて取り除きます（図2）。この芽かきは1回だけ行い、これ以降に出る芽はそのまま生かします。この作業をすると株が充実します。

【乾燥対策】

乾燥させると株が弱って収量が減ったりイモにひび割れが入ってしまうので、夏場は株元に敷きワラをするとよいでしょう。それでも土が乾くときは、1週間くらいの間隔で朝や夕方に畝間に水やりをします（図3）。

【降霜の前に全て収穫する】

霜が降りる前の11月初め頃が収穫のタイミングです。霜に当たってしまうと品質や貯蔵性が悪くなります。

地上部の茎葉を地際で刈り取ると作業がしやすくなります。少し離れたところからスコップの刃を差し込んで、株ごと掘り上げましょう。

【保存】

掘り上げた後、貯蔵するものは排水の良い畑に60㎝ほどの深さの貯蔵穴を掘って逆さに生け込みます。厳寒期には上にかぶせる土を10～15㎝の厚さに増します。

室内で保存する場合は、土付きならそのまま、洗ったものはよく乾かして新聞紙にくるみ段ボール箱などに入れて保存します。5℃以下に長く置くと品質が低下するので考慮して保存場所を選びましょう。

農閑期に行う土づくり 寒起こしと天地返し

最初は柔らかかった土は野菜を作り続けると次第に硬くなり、水はけが悪くなって病害虫が出やすくなります。春に備えて、菜園に野菜が少ないこの時期に土づくりをしましょう。

【水はけと通気の良い土】

根は水に溶けた酸素を吸って生長します。水と空気が土粒の隙間を動きやすいような土の構造が大切です（図1）。水はけを良くするには土を深く耕し、下層の硬くて水の抜けにくい土層を壊します。団粒を作るのは砂や粘土をくっつける役割をする堆肥などの有機物です。寒起こしや天地返しに合わせてバーク堆肥、家畜ふん堆肥などの有機物を混入します。

図1 良い土の組成と団粒構造

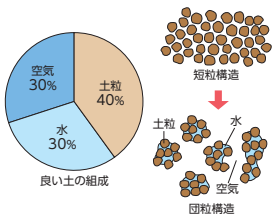
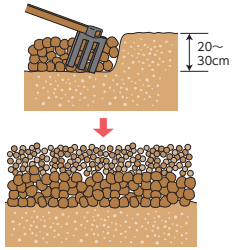


図2 寒起こし



【寒起こし】

厳寒期の1、2月に菜園を20～30㎝粗く掘り起こし、土の塊を寒気にさらす作業です。土塊に含まれる水が夜間には寒さで凍結し、日中には溶けて乾燥します。この繰り返しで土塊が次第に崩れて、ふかふかの土になります（図2）。土中の害虫が寒さで死滅する効果も期待できます。

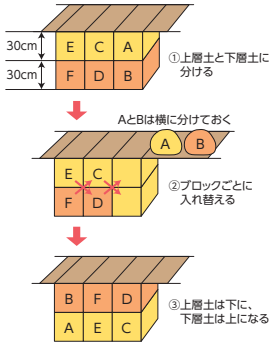
【天地返し】

同じ場所で野菜を長く栽培していると、上層土には養分が蓄積し、下層土には硬く根が入りにくくなっていきます。上層土には土壌病害原菌や有害センチュウが増えてきます。このような畑では連作障害が発生し、野菜の生育が悪くなります。

天地返しは、表面から30㎝程度の上層土とその下60㎝程度までの下層土を入れ替える土壌改良法です（図3）。普段耕す土層はやわらかでも、その下に硬い土層があることがあります。これを耕盤（こうばん）と言います。長い間、トラクターのロータリー部分で耕耘（こううん）を続けていると耕盤ができてしまいます。天地返しで、耕盤を崩すことができます。

これらはきつい仕事なので、作業の少ない冬のうちに行っておくと良いでしょう。連作が心配な菜園では、障害を避ける対策としても考えてみましょう。

図3 天地返しの方法



サトイモの品種選び

親イモと子イモを食べる品種

セレベス

ぬめりは少なめで肉質はホクホク。別名「赤目」、「大吉」などと呼ぶ。

親イモと子イモ、葉柄（芋茎）も食べる品種（他品種に比べ葉柄もアクが少なく食用できる）

八頭（やつがしら）

ぬめりは少なめでホクホクしており、あっさりした味わい。

親イモを食べる品種（子イモがつきにくい品種）

京イモ（きょういも）

きめ細かくホクホクで煮崩れしにくい。京イモの一種に筍の形に似た筍芋（たけのこいも）がある。

子イモを食べる品種（他品種に比べ親芋が特に硬く食べるのに適さないといわれている）

土垂（どだれ）

ぬめりが多くねっとりした食感でやわらかく味が良い。煮物に向く。

石川早生（いしかわわせ）

極早生で子芋がよくつく。粘りが強い。蒸すと皮離れがよく、煮物のほか「きぬかつぎ」にも向く。